

令和元年5月10日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02120

研究課題名(和文) 哲学的当事者研究の展開：重度・重複障害者と慢性疼痛患者のコミュニケーション再考

研究課題名(英文) Development of Philosophical Tojisha-Kenkyu (Self-directed Studies): Rethinking communication for People with Severe and Multiple Disabilities and Chronic Pain Patients

研究代表者

稲原 美苗 (INAHARA, Minae)

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：00645997

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、身体表現や造形制作を応用した当事者研究の実践を踏まえた上で、「言語表現が難しい当事者」と「言語表現できない症状のある当事者」に関する研究を実施した。1年目にスウェーデンの特別支援学校などで身体表現実践を続けてきたエマ・グラン氏を、2年目にイギリスの医療現場で慢性疼痛患者との造形制作を実践してきたデボラ・パッドフィールド氏を招き、それぞれワークショップと国際シンポジウムを行った。本研究では、それらの実践研究をまとめて現象学的な考察を行った。言語表現をそのまま使えない当事者がそのとコミュニケーションを向上できるのかという問いに挑み、既存の当事者研究や自助実践のあり方を再考した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は医療、福祉、特別支援教育などの当事者(利用者)が支援者(専門家など)とのコミュニケーションそのものを向上していくことによって、支援のあり方を多角的に考えられるようになる可能性を提案した。スウェーデンやイギリスからコミュニケーション実践者の二人を招き、共同研究する機会を得た。そのプロセスの中で、当事者と支援者が対話を重ね、当事者の「生きづらさ」や「身体」を捉え直す態度を養うことで、それぞれの問題を解決する一助となることが明らかになった。それらの成果を現象学的に分析したものを国内外の学会などで発表し、専門家任せの支援から当事者主体の支援へと移行することを示唆し、哲学的研究の意義を再考した。

研究成果の概要(英文)：This research project, based on the practice of tojisha-kenkyu (self-directed studies), was carried out in order to understand both those who have difficulties to express anything in language and symptom which they find difficult to express using language. Both Ms. Emma Gran, who has taught dance classes in special needs schools in Sweden (the first year of this project), and Dr. Deborah Padfield, who has practiced co-creating artwork with chronic pain patients in the UK (the second year of this project), were invited to conduct a workshop and to be a keynote speaker in international symposiums. In this research project, we studied those practices with a phenomenological approach. The project attempted to answer the question as to how subjects who cannot use any verbal expression can improve their communication, and reconsidered the way of conducting tojisha-kenkyu and self-help practices.

研究分野：臨床哲学

キーワード：当事者研究 哲学対話 慢性疼痛 障害の哲学 現象学 臨床哲学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 「哲学的当事者研究：身体障害者のための自助プログラムの構築」(平成25～27年度基盤研究C、課題番号25370010)の研究プロジェクトの中で、本研究代表者である稲原自身や他の障害当事者たちの経験を記述し、哲学的に分析して、「生きづらさとは何か」という問いについて考えた。当事者研究を使った身体障害に関する哲学的研究を展開してきた。

(2) 障害を研究対象にする中で、言語表現することに困難を抱えている当事者(重度・重複障害児)または言語で表現できない症状のある当事者(慢性疼痛患者)の立場から既存の当事者研究の有効性を問い始めた。本研究では、哲学(特に現象学)の知見を取り入れ、重度・重複障害児と慢性疼痛患者の支援プログラムの構築することを目指した。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、2つの課題がある。言語表現をすることに困難を抱えている当事者、または言語表現ができない症状のある当事者にとって、「当事者研究」は有効だろうか。言語を使わずに「当事者研究」をすることが可能だろうか。

(2) 「当事者研究」は、障害当事者の視点から「生きづらさ」を多角的に捉え直し、固有の問題を詳細に言語化する試みである。しかし、言語表現をすることに困難を抱えている当事者や言語で表現できない症状のある当事者にとって、「当事者研究」は彼らの自助に直接的に結びつかないという課題が残った。本研究では、非言語的なコミュニケーションそのものを見直す必要性を訴えるために、スウェーデンとイギリスからそれぞれ実践者を神戸に招き、研究協力者を若干名募り、ワークショップやシンポジウムを開催し、実践内容を記述して分析を行った。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、まず、非言語的コミュニケーションに焦点を置き、身体表現や造形制作を用いた実践に関するワークショップを企画・運営した。それらの実践を分析し、考察を重ねた。その分析方法として現象学的アプローチを採用した。

(2) 現象学的アプローチとは、障害や慢性疼痛の因果関係を明らかにしようとするものではなく、むしろ、生きられた経験としての事象の本質を明確にしていくことを探究する記述的研究方法である。特に、稲原(研究代表者)、池田と浜渦(研究分担者)は、これまで多様な臨床現場での患者や高齢者、そして、障害者の経験や生活世界に焦点を当てた現象学的な研究を行ってきた。それらの研究に共通しているテーマは、人間の行動や経験にはすべて、その当事者特有の意味があり、その意味を尊重したいということであり、そのような当事者主体のテーマを明らかにするには、現象学的アプローチが最適な方法だと考えた。

4. 研究成果

(1) 現象学的アプローチでは、当事者に関する仮説や理論的な前提を持たずに研究を始めることになっている。本研究でも、当事者の経験や彼らが生きてきた全体的な世界を捉えるために、現象学的な研究方法を使った。当事者特有の意味、感情、そして考え方などは数値化されれば、詳細な経験部分が切り捨てられてしまう恐れがあるが、現象学的アプローチを採用したので、経験をあらゆる角度から分析できた。

(2) 平成28年度においては、所記の目標であったように重度重複障害児のためのコミュニケーションを支援している実践者や研究者を国内外から招き、そのあり方について考察を深めた。平成29年2月にスウェーデンのヨーテボリ市立カナベック特別支援学校で多様な障害と共に生きている子どもたちにOriginal Playというメソッドを使った身体表現法を教えているエマ・グラン(Emma Gran)氏を招へいし、Original Playの実践ワークショップ(2月19日)と学術シンポジウム(2月20日)を神戸大学で開催した。平成29年2月19日に神戸大学大学院人間発達環境学研究所のサテライト施設「のびやかスペースあーち」で開催されたワークショップは、グラン氏がコミュニケーションに悩みを抱える子ども(4名)に、身体的な調和、動き、触れ合いを使って、「遊び」を創造できるようにするOriginal Playを実践した。当日、グラン氏の実践に対する質疑応答だけではなく、ワークショップに参加していた保護者や実践者・研究者(歯科医師、介護福祉士、音楽療法士、特別支援教育の研究者、聴覚障害のある当事者、現象学者など)との対話を交えながら、障害のある子どもたちのコミュニケーション支援について考える機会を得た。しかしながら、障害のある子どもたちに話を聞くことができず、当事者のコミュニケーションに関する詳細な調査をすることができず、大きな課題が残った。

(3) 平成29年2月20日に国際シンポジウム「身体表現の可能性を探る 障害児・者のコミュニケーション再考」が神戸大学鶴甲第2キャンパスで開催された。このシンポジウムでは、上述したエマ・グラン氏が基調講演をし、そして、障害児・者とともに身体表現を創り上げてきた実務者・研究者3名、大阪大学COデザインセンター准教授の本間直樹(現：ほんまなほ)氏、舞踊家の佐久間新氏、立命館大学スポーツ健康科学部准教授の永浜明子氏が講演をした。

新たな表現やコミュニケーション支援の可能性を探るきっかけになった。

(4)平成29年度、本研究の海外研究協力者であるデボラ・パッドフィールド(Deborah Padfield)氏(多くの慢性疼痛患者たちと共に「痛み」をアートにすることを試みてきたイギリスの写真芸術家、The Slade School of Fine Art・University College of Londonの研究者)を神戸に招へいした。慢性疼痛を持つ調査協力者を募り、3名(稲原を含む)が集まった。パッドフィールドと共に彼女たちそれぞれの「痛み」を造形化し、その後、当事者研究のように自らの痛みを研究するワークショップを神戸大学で開催した。3日間のワークショップで「痛み」を表現できない当事者にとって、自らの痛みを「見える化」した。パッドフィールド氏やほかの当事者と共に痛みを言語化できるようになり、その過程で当事者の疼痛が癒されることが明らかになった。その後、神戸大学で開催した国際シンポジウムの中でパッドフィールド氏が基調講演をし、日本の研究者(心理学者、哲学者、歯科医、社会教育の専門家)、アーティスト、疼痛当事者などが集まり、多角的な議論ができた。日本の医療従事者(慢性疼痛患者の支援者)をシンポジストとして招くことが叶わなかったが、本研究の分担者である大阪大学歯学部附属病院講師の村上旬平氏が、歯科治療の際に起こる急性疼痛と慢性疼痛の違いを指摘し、急性の痛みにはパッドフィールド氏の実践が適さないことも話し合われた。パッドフィールド氏との実践に影響を受け、新たな現象学的な質的研究の可能性を探り始めた。平成29年11月25日に開催された日本現象学・社会科学会第34回研究大会のシンポジウム「当事者の声を聴くことから研究へ」で、現象学的看護研究者の西村ユミ氏と社会学者の白井千晶氏の提題を受ける特定質問者として登壇し、パッドフィールド氏の実践を紹介し、当事者の声を聴くための仕掛けとして痛みをアート化し、それについて語るという方法を提案した。

(5)平成30年度は、平成28年度・平成29年度の実践成果を踏まえて、障害のある当事者や慢性疼痛患者のためのコミュニケーションのあり方について考察した。特に、パッドフィールド氏との造形制作の実践を現象学的に分析し、研究成果をまとめた。本研究は当事者の身体感覚や経験を重要視してきた。研究代表者も研究分担者もこれまで多様な「障害」や「生きづらさ」を研究対象にする中で、言語表現が難しい当事者及び言語表現できない症状をもった当事者の視点から既存の当事者研究の有効性を考えてきた。障害児のための身体表現の記述は非常に難しかったので、成果として挙げられなかったが、慢性疼痛患者による造形制作実践の記述に関しては、新たな当事者研究の方法を提案することができた。

(6)まず、慢性疼痛のある当事者は自らの症状を医療者や支援者に詳しく伝えることができない。疼痛の症状について語れないことによって、自分自身もどのように生きづらいのかという認識を持たず、周囲に生きづらさを理解されないことが多い。疼痛という現象を造形制作によって外在化していく作業の中で、自らの疼痛を語り始めることができる。疼痛のアートを見ながら、他者に疼痛経験を説明できるようになり、それによって支援につながる。パッドフィールド氏自身も慢性疼痛患者であり、ピア的な対話の中で造形制作を進めている。本研究では、短い期間であったが、3名の慢性疼痛患者がパッドフィールド氏の実践に参加した。疼痛を外在化し、自らの痛みについて語ることによって、エンパワメントに繋がるという結果が得られた。パッドフィールド氏の実践と従来の当事者研究との大きな違いは、問題や疼痛を外在化するだけでなく、「それらの疼痛から解放されたら」という仮定的な想像をさせ、その問題や疼痛への対処方法を考えるように当事者を導く実践であるという考察に至った。

(7)コミュニケーションを考える際、当事者側のコミュニケーション力(発信力)の向上ばかり注目し、受け手である支援者側のコミュニケーション力を考えてこなかった。しかし、当事者側で言語表現が難しい場合のコミュニケーションを考えると、支援者側からの受信力を調査する必要があり、本研究では欠けていた部分だと感じている。エンパワメントに繋がるコミュニケーションを考える上で、看護学分野で行われている現象学的アプローチをもっと採用すべきだったと反省している。だが、慢性疼痛の実践では、成果を出せたと確信しており、慢性疼痛患者とその支援者とのコミュニケーションを改善するために、「アートを使った当事者研究」「アーティストとコラボレーションする疼痛の見える化」は有用性を示した。それは、当事者の経験をそのまま記述し、研究していく意義を考えるために、重要な手掛かりになることを意味している。最後になったが、本研究の成果を国内外の学会で発表できた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

INAHARA, Minae, Disability and ambiguities: technological support in a disaster context, Routledge Handbook of Well-Being (Kathleen T. Galvin ed.) 2018 124-132

INAHARA, Minae, Rethinking Feminist Standpoint Theory: The Situated Knowledge of the Disabled and Tojisha-Kenkyu, Internat i n l Christian University Peace Research Institute Monograph Series #1: Disabilities in Context Toward an Empowering Vision, 2018, 23-28

稲原美苗、当事者ととともに：現象学的質的研究の可能性を考える、現象学と社会科学、1

巻、2018、31-48

稲原美苗、障害とスティグマ 嫌悪感から人間愛へ、思想、1118号、2017、42-54
村上旬平、稲原美苗、竹中菜苗、青木健太、新家一輝、松川綾子、有田憲司、秋山茂久、
障害者歯科医療における障害のある子どもをもつ親への支援 学際的研究から見える現象、
障害者歯科、査読有、38巻(1)、16-23

〔学会発表〕(計6件)

INAHARA, Minae, The Ghost of Eugenics in Japan: Exploring the Intersections of Disability, Asexuality, and Anonymity, Association for Asian Studies 2019 Annual Conference, 2019

INAHARA, Minae, Expressing Pain through Fine Art: The Power of Dialogue, The XXIV World Congress of Philosophy, Beijing, August 2018

稲原美苗、哲学的当事者研究の可能性造形制作を通じたピアとの対話の意義について、日本哲学プラクティス学会 第1回大会、2018

INAHARA, Minae, Visualizing Pain with an Artist: A Phenomenological Study of Embodied Subjectivity in Dialogue, 8th PEACE (Phenomenology for East Asian Circle) Conference, 2018

稲原美苗、哲学対話における現象学的アプローチ、第40回臨床哲学研究会、2017

稲原美苗、障害とスティグマ 嫌悪感から人間愛へ、第32回京都賞記念ワークショップ、2016

〔図書〕(計1件)

浜渦辰二、晃洋書房、ケアの臨床哲学への道 生老病死とともに生きる、2019、568

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 浜渦 辰二

ローマ字氏名: (HAMAUZU, shinji)

所属研究機関名: 大阪大学

部局名: 大学院文学研究科

職名: 招へい教員

研究者番号(8桁): 70218527

研究分担者氏名: 村上 旬平

ローマ字氏名: (MURAKAMI, jumpei)

所属研究機関名：大阪大学
部局名：歯学部附属病院
職名：講師
研究者番号（8桁）：70362689

研究分担者氏名：池田 喬
ローマ字氏名：(IKEDA, takashi)
所属研究機関名：明治大学
部局名：文学部
職名：専任准教授
研究者番号（8桁）：70588839

研究分担者氏名：津田 英二
ローマ字氏名：(TSUDA, eiji)
所属研究機関名：神戸大学
部局名：大学院人間発達環境学研究科
職名：教授
研究者番号（8桁）：30314454

(2)研究協力者

研究協力者氏名：グラン エマ
ローマ字氏名：(GRAN, emma)

研究協力者氏名：パッドフィールド デボラ
ローマ字氏名：(PADFIELD, deborah)

研究協力者氏名：水谷 みつる
ローマ字氏名：(MIZUTANI, mitsuru)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。